

あたたかな生活

中野 咲希
(北九州市立大学 (学生))

間部学、若林和夫、大竹富江、豊田豊…そして半田知雄。挙げはじめるとキリがないほど多くのブラジル日系画家の作品が、画集、または展覧会作品集として「ブラジル移民文庫¹」でみることができる。中でも半田知雄の画文集『ブラジル移民の生活²』は、およそ 50 ページにわたって半田の 36 作品および簡単な説明が載ったもので、見ごたえ充分、とても魅力的な画文集だ。白状するが、つい先日まで著者は画伯半田知雄を知らなかった。前提として、JICA 海外移住エッセイの募集を知ったのは日本人移民の歴史と社会に関する大学の講義だった。その講義とは、移民（＝ブラジルだけではなくハワイ、アメリカ、カナダ、満州など多岐にわたる）に関する概説、その社会、また各国間での影響関係といったことにまで触れる、という興味深いものだ。そこで紹介されたのが JICA 海外移住エッセイで、このエッセイを執筆するにあたり著者は講義で触れられているような移民社会という大きな枠組みはもちろんだが、それ以上にもっとフォーカスした個人に関心があった。社会の中で生きる一個人、それが例えば芸術家—ここでは日系ブラジル人の画家たち。中でも、至る所で目にする名前がその先駆者たる半田知雄だった。彼の作品をみて、すぐに関心を惹かれた。

半田知雄（1906－1996）は 1917 年、11 歳のときにブラジルへわたり、父母とともにコーヒー農園で働く。14 歳になると、サンパウロへ出て新聞の文選工として働きつつ、語学に励み、また絵の修行をはじめた。1935 年にはサンパウロ美術学校を卒業、その後サンパウロ美術研究会（聖美会）を結成した。移民の生活を描いた彼の多くの作品は、絵画作品としてのみならず移民研究の史料としても評価を受けている。

¹ https://www.brasilnippou.com/iminbunko/iminbunco_capa1.htm 「ブラジル移民文庫」（最終閲覧日 2023 年 6 月 24 日）

² 半田知雄『ブラジル移民の生活』無明舎、1986 年。

また、半田自身もブラジル日本人移民研究者として数々の著作を残しており、それらは現在の移民研究においても重要な資料とされている³。

前述した半田の画文集『ブラジル移民の生活』のうち、まず目につくのはコーヒー農園の絵だ。コーヒー豆の採取や積み出し、帰り道まで、農園での作業に従事する人々を題目にした絵が多くみられる。少し黄みがかかったような優しい色合いに、太めのタッチで描かれる農園の植物や人々はどこか安心できるような印象をもつ。また、〈聖ヨハネ祭り〉や〈冬祭りとバロンあげ〉といった題目では、どちらの絵も中央にある焚火やバロンを中心として多くの人が集まっている姿が描かれている。この祭りはもともと主としてポルトガル人が祝った⁴という記述から、描かれているのは日本人移民で、彼らが異国の祭りを祝っているということが分かる。〈風船を追う子供たち〉や〈日曜日の午後〉といった作品には、人々の楽しみの場面も描かれている。驚いて跳ねだすラバは子供同様に生き生きとした躍動感をもち、その喜びを表しているように見える。また、家族が集まってギターをする様子は日曜日の午後というタイトルに象徴されるように休日の雰囲気漂う作品だ。〈尺八葬送〉と〈敬老会〉といった作品も作品全体のなかで際立っている。前者は、尺八が上手だった人の送別を題目としていて、20人近くもの人々が描かれている青い色調が印象的な作品だ。後者は移住地で盛んに行われていたという敬老会が題目で、明るい色の服を纏った女性の踊る姿やそれに合わせて人々が手拍子をする姿が描かれている。さらに、〈牧場内の洗濯場〉で描かれている洗濯をする女性たちは、井戸端会議のにぎわい⁵という言葉で親しみをもって表されている。

半田の描いた作品をみていくと、そこに多くの人々が描かれていることに気が付く。上に挙げたコーヒー農園の一場面にも、休日の一場面にも、祭り、敬老会の一場面にも

³ https://megabrasil.jp/20150525_22508/ 「MEGA★BRASIL-JICA 横浜海外移住資料館で『移民画家 半田知雄展』開催」（最終閲覧日 2023 年 6 月 24 日）

⁴ 『ブラジル移民の生活』 37 頁

⁵ 『ブラジル移民の生活』 46 頁

も、とにかく多くの人の姿が描かれている。移民生活の一場面が切り抜かれているのだから当然のことだが、年齢や性別の様々なそこで暮らす人々が描かれていることが分かる。例えば、コーヒー農園を題目にした作品―〈コーヒー採取・もぎとり⁶⁾〉や〈コーヒー採取・かきあつめ⁷⁾〉では、作業に従事する人々が10人近く描かれている。彼らはそれぞれが各々の作業をしているが、その顔の向きからは互いに声を掛け合っているような様子がかげえる。作業を分担し、声を掛け合い採取を進めていく、そんな姿だ。特に注目したいのは、そこでの人々の表情だ。『ブラジル移民の生活』における半田の描く人々はその表情を描かれないこともあるうえに、描かれている場合もそれほどはっきりとした描かれ方ではないことが多い。しかし、その中でも描かれている人に焦点をあてることでみえてくることがあるはずだ。〈コーヒー採取・かきあつめ〉では、画面中央の女性と画面右側の男性の表情が描かれている。女性は口を軽く開き、何か声掛けしているようで、また何か笑いかけているようでもある。右側の男性も口角をあげてそれに応答しているようであるし、ほほえんでいるようにも捉えられる。〈播きつけどき〉では、画面中央の夫婦と画面左側の女性の表情が読み取れる。一休みする夫婦は赤ん坊をみて微笑み、種蒔きをする女性は口角のあがった優しげな表情をしている。どちらも、目元がはっきりと描かれていないことで、口元のささいな描かれ方がより強調され、効果的に観るものに印象付けをしている。他にも、〈親と子の肖像〉や〈モミのふきわけ〉、〈奥地の野菜づくり〉など多くの作品で人々の表情が描かれているが、どの表情にもどこか優しげなところがあり、苦しみや不平不満を感じさせるものは読み取ることができない。では、当時の社会は移民にとってそれほど穏やかで、苦しみや不平不満の生まれないようなものであったのか。

日本政府がサンパウロのコーヒー農園への契約労働者送出国を許可したのは1907年だった。アメリカでの紳士協定・カナダでのレミュー協定など、国際的な事情もあつ

⁶⁾ 『ブラジル移民の生活』2頁

⁷⁾ 『ブラジル移民の生活』3頁

てのことだった。家族移民として渡った定着移民たちは「一日の賃金三人家族で9～10円」という宣伝文句のもと栽培に励むが、実際には不作で1円にも満たないこともあったという。宣伝文句にうたわれているような順風満帆な生活とは程遠いものであった。慣れない土地、慣れない気候。異国での新しい生活への苦労は容易には計り知れない。〈引越し〉という作品の解説では、「われわれも、かつては契約労働者として大農場へはいったとき、その労役にたえられず夜逃げした⁸」ということが言及されている。労役にたえられず夜逃げ。コーヒー農園で従事する、ブラジルで移民として生活していくことは、当然ながら簡単なことではなかった。そうした現実を、青年期に実際に体験してきた半田が描いたのがこうした一連の作品だった。つまり、彼はブラジル移民生活の難しさを知っていて、また自身もそれを実際に経験してきたうえで、『ブラジル移民の生活』にみられるような作品を描いてきた。そこにみられる人々は、声を掛け合い支え合いながら作業に従事している。子供たちは風船を追って遊び、休日には家族でギターを楽しんでいる。現地の祭りごとを受容し、アコーディオンやバオンで祝う。敬老会で踊り、親族や周りの人々とのつながりを大切にしている。そこに描かれた人々は、いつも優しげな表情をしていた。土地での生活を描くのに、苦しい現実、過酷な現実のほうを強調して描くことで伝え残していくという方法もある。けれども、半田はそちらを選ばなかった。むしろ、人々が明るく楽しみをもち、優しげに生きているさまを見出し描くほうを選んだ。そうした人々が支え合うあたたかな生活は、半田自身にとっての理想・師範となるものであったのかもしれないし、また当時の人々にとっても優しく、支えとなるものだったのかもしれない。1936年のとある日の邦字新聞には半田の展覧会をみた書き手による特集が載せられている⁹。そこには色彩や構図に触れた展示をみての感想が親しみ深くつづられている。注目したいのは、「努力して、行き詰って、人を怨まず転向する。そこに人の心を動かす

⁸ 『ブラジル移民の生活』 33 頁

⁹ 「邦字新聞デジタル・コレクション」 <https://hojishinbun.hoover.org/?a=d&d=ses19360429-01.1.27&srpos=4&e=-----ja-10-ses-1--img-%e5%8d%8a%e7%94%b0%e7%9f%a5%e9%9b%84-----> (最終閲覧日 6 月 26 日)

書の味が又出よう」という書き手による結びの言葉だ。これは、半田の画家としての在り方のことを表現し、最大限の称揚を込めて贈られた言葉だ。はじめから恵まれた才能を持ち合わせていたわけではなく、地道に努力を重ね、行き詰っても何かを怨むのではなく、転向するため力をつけ評価を得る。これは同時に、移民としての在り方だと捉えることもできると考える。決して恵まれた環境とは言えずとも努力を重ね、行き詰っても怨み言をこぼすのではなく転向していく。そうした移民としての在り方を、画家である半田の在り方は体現していたのかもしれない。だからこそ、半田の作品は「人の心を動かす」のだ。

日本ではこれまで、ブラジル移民画家にフィーチャーした展示として移民史料館での「半田知雄特別展¹⁰」や横浜海外移住資料館での「移民画家半田知雄の世界¹¹」、兵庫県立美術館のコレクション展示¹²などといった展示が行われてきた。それほど多くの機会があるとはいえないものの、確実に移民画家たちの作品に触れる機会がつくられてきた。絵画作品に触れて知っていくということは、ささいなことのように、当時の社会や人々の思いにつながり、接近することができる有用な手段だ。移民生活のあたたかな場面、人々のつながりを描いた半田知雄、その画家としての在り方が当時の人々の移民生活の支えにもなったであろう半田に、遠く離れたこの時代、遠く離れたこの地から思いを馳せている。

¹⁰ 「journal ニッケイ新聞」 <https://search.yahoo.co.jp/amp/s/www.nikkeishimbun.jp/2017/171011-71colonia.html/amp%3Fusqp%3Dmq331AQGsAEggAID>（最終閲覧日 6月26日）

¹¹ 「他にはない神奈川のニュースを！神奈川新聞カナコロ」
<https://www.kanaloco.jp/news/life/entry-60700.html>（最終閲覧日 6月26日）

¹² 「ブラジル日系人画家の系譜」
https://www.artm.pref.hyogo.jp/news/press/pdf/press_y100707.pdf（最終閲覧日 6月26日）